

Thank you so much

国立病院機構 長崎医療センター 丸山 裕稔

私がこの研修に参加した目的は、日常業務に追われる毎日の中で研究を継続していくモチベーションを保ち続けるのに難しさを感じ始めていた自分への啓発と、研究に対する思いの再確認のためである。研修生は大学教員、大学院生、大学病院、民間病院など、職場環境の異なる仲間で構成されていた。このように職場環境、施設規模、職場での役職は違うが、高い意識を持つ仲間と語り合う中で、比較的研究に対し恵まれた環境にある大学病院等ではなく、私と似た環境でも意識を高く持ち、研究を続けている仲間との出会いから確認できたことがある。それは施設規模の差は研究環境を左右することは確かであり、研究施設は臨床現場に比べ高いレベルの研究を行っている。しかし研究はレベルの問題ではなく、どんな研究テーマでも日常での疑問、悩みからスタートしている。それを解決し、最後は患者さんのためになるよう高い意識レベルを持ち続け、努力していく事はどんな研究テーマにおいても同様であるということだ。私にとってこれが再確認できたのは、今後研究を続けていく上で重要な意味を持っている。

学会の国際化について、国際化を反対する放射線技師はいないと私は考える。なぜならそれは放射線技師全体のレベルアップや地位向上には必要不可欠なものであるからである。ではなぜ国際化を達成することが困難なのか。そこには言葉の壁が存在している。今回の研修でも感じたことだが、たとえ自分が理解していてもそれを相手に伝えることができなければそれは理解していないことと同じであるということだ。日本人しか存在しない学会会場で、英語によるスライド、発表、質疑応答を行うことが適切なのだろうか。ただでさえ発表7分、質疑応答3分の中で発表内容を理解する事が困難であるのに、英語となるとますます困難であり、プラストレーションが蓄積する参加者も増加すると思う。やはり英語発表セッションを設け、年々増加させていくことが最善であると私は考える。また学会の国際化を行うには、教育現場における英語教育は重要である。教育機関で英語教育を受け、英語による学会発表を常識と感じる若者が増加すれば、国際化のスピードは一気に加速すると思われる。またそのような教育を受けた若者がJSRTに違和感を覚えないためにも、数年後にはすべて英語での学会発表とするのがベストであると考える。そのためにも学生のみではなく我々も英語を学び言葉の壁だけでなく、国際化に対する心の壁を打ち破ることが重要である。

次に学術大会のあり方についてであるが、私は遠方の会員が総会学術大会に参加することは非常に大変なことであり、そこには職場の理解や交通費等の金銭的な問題も発生していると思う。しかし学術大会に参加することで得られる経験、情報、刺激等は個人および職場のレベルアップには欠かすことのできないものである。このような問題を少しでも解決するためサテライト会場の設置や、講演内容をWEBで配信することも一つの方法であると思う。また国際化の問題とも関係してくるが、優秀発表演題には国際学会へ参加を今以上に金銭的にサポートすることも、会員の意識向上には必要ではないだろうか。しかしいずれにしても、金銭的な問題が発生してくる。この問題を解決するには、学会参加者を増やすことが最良であり、それには現在学会に参加していない会員を参加させる必要がある。そのためにも基礎講座など教育講座を充実させ、また若手が発表する場を個別にもうけ、発表内容だけでなくスライド構成などの指導をおこなうといったセッションの開催も、参加しやすい学術大会とするためには必要なではないだろうか。参加することにより誰もが刺激を受け、意識改革に繋がることも学術大会のあるべき姿の一つであると考える。

私は今回のこの研修に参加することで、スタンフォード大学で行われているC-13 Hyper Polarized MRIやHigh field MRIといった最先端の研究内容や充実した研究環境を垣間見ることができ、今後の放射線技術の発達に伴いさらに高い知識と技術を身につける必要性があることを確信した。また日本の放射線技術のレベルの高さが間違いなく世界トップクラスであることを確認出来たことは、今後の自信に繋がるであろう。そして何より高いモチベーションを持った全国の仲間との出会いは、私の放射線技師人生においてかけがえのない財産であり、今後お互いが刺激し合うことが、日々の診療業務や研究活動に重要であると考える。最後にスタンフォード大学の皆様、日本放射線技術学会、GEHC-J、引率でご尽力いただいた金沢大学の田中氏、海外研修に助言いただいた九州医療センター酒本氏、海外研修の参加を快諾してくれた秋永技師長はじめ放射線部諸兄に深く感謝いたします。



ACR BI-RADS の Chair, Debra M. Ikeda, M.D.と筆者